

# 観光都市の表と裏—京都を再考する

中村 修也

(教育学部)

A study of Kyoto in Connection with City Tourism

Shuya Nakamura

Faculty of Education

## 要 旨

京都は作られた観光空間ではなく、歴史的な都会であった。その都会は何度も焼け野原となり、その都度住民の手によって復興されてきた。平安京を基盤とする京都は理想的な生活空間であり、東京のように広がり過ぎると、住民不在の都市となる。京都が日本人の古都たりえたのは、京都の住民が存在し、守ってきたからである。我々は京都の存在価値を再認識して、積極的に京都とその文化財を守る姿勢を持たなければならない。

### 1 はじめに

平成6年は京都にとって、平安京遷都が行われてから、1200年目ということで、「建都1200年記念祭」が開催されました。

さて、京都にとって平安京への遷都は、まさに古代都市のスタートであり、現在の京都の原点ともいえる出来事であったわけですから、その記念祭は今世紀最大のイベントとなってしまうべきです。

ところが、全国的に「建都1200年祭」が話題になったかという、そうではありません。平成6年には、和歌山で「リゾート博」、三重では「まつり博」というのが開催されました。関東ではどうか知らないのですが、すくなくとも関西のテレビでは両博覧会のCMがしつこいくらいに放映されました。ところが京都の「建都1200年祭」はまったくTVで宣伝されませんでした。かえってJR東海が企業利益のために「そうだ、京都、行こう」というキャッチフレーズで京都旅行を宣伝してくれています。

何を言いたいかと申しますと、京都の人は、歴史や伝統を誇りとしています、「観光」を自慢したくないということなのです。つまり「観光都市」ということを自認したくないという傾向があるわけです。

平安京に都が遷されてから1200年ということは、これは大変なことです。もっと大規模に博覧会を開催してお祝いすべきことです。

### 2 あこがれの対象としての京都

京都が観光地であることは、すくなくとも他府県の人達には自明のことです。ところが京都の人は、京都が観光地とよばれるのを良しとしない傾向があります。

その理由は「観光地=地方都市」という図式があるからです。

京都は単なる地方都市と看做されたくない、その意識が非常に強いのです。地方都市とはつまり、悪い表現をすれば田舎ということですから。長い間、天皇が居住していた京都は「みやこ」と呼ばれることに慣れすぎて、田舎と

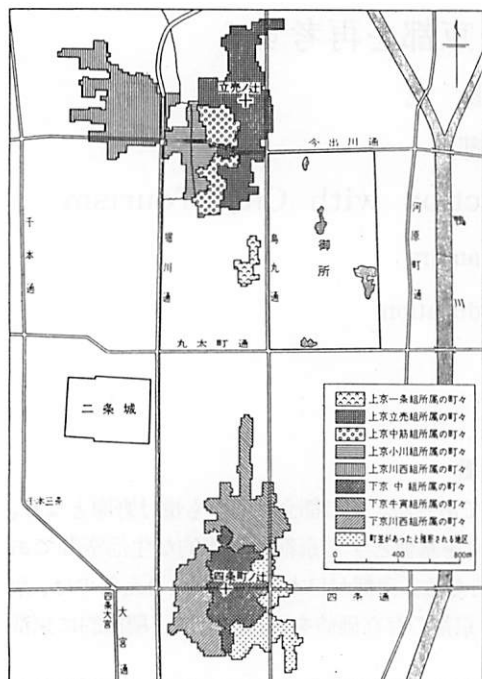


図1 元亀3年ころの京都「町組」  
 (『京都の歴史』第4巻より転載)

呼ばれること、地方都市と看做されることに、非常に抵抗があるわけです。

もちろん「みやこ」といっても、実質的に「みやこ」であったのは、平安時代と室町時代だけであって、鎌倉時代は鎌倉に、江戸時代は江戸に首都がおかれていたわけですから、その京都人の「みやこ」意識には多分に自己中心的な解釈が含まれているわけです。この京都人の自惚れには、王朝文化以来の文化の主流派であるという自意識があります。しかし実際は、江戸期には文化も江戸にその地位を譲ることになるのですが、今度は「伝統」という看板を掲げて、その優位さを維持しようとし、人々も時間の経過というか、歴史の重みには対抗できず、それを認めてしまうところがあったのです。この歴史性は風光明媚な観光地とは全く異なる、本来の京都の都会性から来る物であるというのが、京都人の意気地なのでしょう。

そして実際、京都があこがれの対象であったことは、政治的レベルだけではなく、文化的レベルにおいてもそうであったことは多くの面から証明できます。

たとえば、室町末期に制作された「洛中洛外図」。これは地方大名の京都土産の一つと言われています。つまり「花の都」に行ってきた、その土産として国許の妻子や家臣に、京とはこのようにきらびやかな所であったと、視覚的に語るために、豪華に描かれた京の鳥瞰図なのです。現在の絵葉書の豪華版といったところでしょう。

『京都の歴史』第4巻には元亀3年(1572)ころの京都の町組の様子を復元した地図がありますが(図1参照)、これを見ると、上京と下京は連続した町屋を形成できていませんでした。上京は立売ノ辻という上立売通と室町通の交差点を中心に立売組・中筋組・小川組・川西組がほぼ一まとまりになり、下京は四条町ノ辻という四条通と新町通の交差点を中心に中組・牛首組・川西組等が一まとまりになっていました。この上京と下京の間、中立売通から二条通までの間には一条組がぽつんとあるほかは何もない状況です。もちろん町組以外の、個人の家屋はいくらかあったでしょうが、それらは無視できるほど、ミヤコであった京都に空地が多くできてしまったのです。

当時の京都の様子をルイス・フロイスの「耶穌会士日本通信」元亀2年9月18日の記事にみると、

当市には約三百の僧院あり。往時当市は甚だ廣大にして、人口多く、戸数三十万なりしが、今は六万なるべし。戦争及び諸物を消耕する時間は此の憐れむべき市を現在の状態に至らしめたり。

とあります。人口30万の根拠は不明で、いささか多いように思われますが、とにかくその荒廃ぶりが窺えます。しかし元亀四年には、同じフロイスの報告に、

上の都は〔尊師の知らるる通〕日本全国の都にして甚だ富みたる人居住し、日本において用ひらるる絹物及び緞子は悉く此処にて製造し、又重立ちたる人々の夫人にして最も高貴なる者住みしが…

(同書、元亀4年4月26日)。

とあるごとく、復興の兆しを見せはじめています。

ところが同年4月には信長による上京焼き討ちが行われるのです。足利義昭と織田信長の軋轢によって、京都一帯が戦場となり、信長の焼き討ち対象となりかねない状況でした。下京はうまく焼き打ちを免除されたのですが、上京は義昭指示・反信長的傾向が強く、ついに焼き討ちにあったのです。フロイスの『日本史』によると、

また〔信長〕は上京〔の市民〕に対し反感を抱いていたので、彼らが提出していた〔銀の〕棒千五百本を受理することを拒絶し、かくて市〔上京〕はただちに放火された。恐るべき戦慄的な情景が展開され、全上京は深更から翌日まで、同地にあったすべての寺院・僧院・神・仏・財宝・家屋もろとも焼失し、確認されたところでは、都周辺の平地二、三里にわたって五十カ村ほどが焼け、〔最後の〕審判の日の情景さながらであったという。とあります。またもや京都が焼け野原とされたのです。

しかし、町衆たちはなんとか復興を実現します。それには豊臣秀吉による京都改造が大きな助力ともなり、影響を与えました。御土居の建設と寺町の形成にそれがよく現れています。

それはさておき、京都復興の様子を再びフロイスの『日本史』に見ましょう。

一五九一年に、この都の町は、同所に居住するために、諸国から移転してくる人々の動きにともなって、建物・殿堂・居宅が数をましていったが、その変貌ぶり

は、以前にこの町を見た者でなければ信じられぬほどであった(天正19年)。とあり、ロドリゲスの『日本教会史』には、都 Miyaco という都市にはきわめて広い道路がついていて、この上なく清浄である。その中央を流れる小川と、泉のすばらしい水が全市に及んでいて、道路は日に二度清掃し水を撒く。従って道路はたいへんきれいで快適である。(中略) 住民の家屋で道路に面したところは、普通は商売をし、商品をおき、さまざまな職業の仕事をする場所であって、その家の奥に彼らの居所や客人用の部屋がある。とも記されています。町衆たちはミヤコとしての都市景観の復元に努力したのです。

京都は近代に至るまで何度も戦火に見舞われています。第2次世界大戦で空襲をあまり受けなかったのが、その印象が強いのですが、首都である宿命といえましょうか、明治維新前にも、京都は「蛤御門の変」で「どンドン焼け」という大火にあい、市街地のほとんどが焼け野原となりました。その度に京の人々は京都の復興を行って来たのです。

さて、江戸期に入ると、政治的首都としての江戸が台頭して来ます。最初は「東夷に京女」という関係でしたが、次第に江戸は都市としての発展を遂げて来ました。百万都市として世界に冠たる大都市への成長です。それに対して、相対的にはありませんが、京都は第一の都市ではなくなります。ことに天明の大火以後は京都の復興もままならず、衰退の方向へと向かったようです。

その京都が、唯一、他に追隨を許さなかったのが、都市としての歴史性ではなかったかと考えます。このあたりから、京都の観光地としての性格が現れてくるのです。

明暦4年(1658)板行の『京童』の中川喜雲の序文に、

いづれのわざにも身をそめ日をおくりしとやかこたん。せめて古郷のつとに。見ぬ

京物語はほいあらじ。仁和寺の法師のひとり岩清水にまうでつる事のあやしく。今少年のさかしきにあないさせて。九重おそとまで見めぐり。鳳闕のめでたきつくり。神社仏閣のかたちをえがき。来歴をしるしてよといへば。

とあります。作者の中川喜雲は丹波馬路村出身、京にて医術を学び、松永貞徳に俳諧も学びました。故郷への土産として本書を撰述したということです。中川はさらに寛文7年に続編の『京童跡追』を刊行しています。序文によると、原稿は万治元年（1658）すでにできていたのですが、「田舎わたらひ」していたため、10年遅れたということです。

その万治元年に山本泰順によって撰述された『洛陽名所集』の序文には、

山城のうち。都のはしばし名にたてる所凡三百有余をあげ。或は宮寺のもとつた。人の由来伝ふるを考へ。しかもその所にながめおける代々の歌まで。たづねもとめ。しるし侍りて。洛陽名所集となづけて。十二巻とせり。

と記されています。この段階で、ざっと数えただけで300の名所があるのだと、さりげなく自慢しているとも読み取れます。

さらに延宝5年（1677）初版の浅井了意作『出来斎京土産』の序文には、

年ころ望みし花の都を見ばやとおもひ、傍目もふらず京都をさしてのぼりつきぬ、聞しにまさりて人の家居もしみやかに、町小路にぎにぎしく職人商人軒をならべ棚をかざり、唐の日本の種々の売物かぎりしられず。

とあるのは、正直に観光目的の出版を明記しているといえましょう。

このような名所記の刊行は、まさに京都の観光地としての表明でもあったのです。と同時に名所旧跡の保存の始まりをも意味しました。京都はミヤコであったばかりではなく、信仰のメッカでもありました。清水寺をはじめ

めとして、京都には多くの有名寺院がありました。その寺への参詣人が引きも切らず、京都へ訪れたことでしょう。

さきほど紹介した『京童』には内裏から始まり太秦までの87箇所の名所旧跡が挙げられています。そのうち寺院41、神社22です。ちなみに寺院を挙げてみますと、

誓願寺	腹帯の地蔵	たこやくし
目やみ地蔵	ちおん院	円山
長楽寺	双林寺	八坂
泰山寺	清水寺	六はら
三十三間	泉涌寺	御影堂
いなばやくし	本願寺	東寺
西寺	大通寺	水やくし
壬生	西方寺	千本えんま堂
本満寺	しんにょだう	革堂
新黒谷	永観堂	南禅寺
東福寺	くらま	いは屋
醍醐	ひゑの山	日吉
高雄	釈迦堂	天龍寺
法輪寺	太秦	

といった所です。ここに金閣寺・銀閣寺が登場しないのは、この二寺が足利將軍家の個人的な山荘であって、信仰の対象ではないからでしょう。もっとも金閣寺は『京童跡追』に「鹿苑寺」と正式名称で出て来ます。しかし「慈照寺」銀閣はまだ登場していません。

87箇所の名所旧跡のうち、63箇所つまり約72%が神社仏閣であるというのは、『京童』が今いうところの観光ガイドブックとは少し性格の異なる物であることを意味します。そしてもう一つ気付くのは、これらの名所旧跡がやはり洛外にあるということです。

洛中は基本的には京都人の住む居住空間であって、それ以外のものではありません。

### 3 江戸から東京へ、京都から古都へ

川端康成の作品に『古都』というのがあります。双子の姉妹が、一人は西陣の本店に拾われてお嬢様として育てられ、一人は親許で



図2 洛中洛外図屏風 (京都国立博物館寄託)

育つものの、早くに両親を亡くし、北山杉の里で苦勞する、といった数奇な運命を送り、再び祇園祭の夜に再会するという小説です。ドラマや映画になり、そのあら筋を知っている方も多いと思いますので、ストーリーは省略させていただきます。

この小説のタイトルとなっている「古都」という表現ですが、京都出身でない私なんかには、なんの抵抗もない、優雅ないかにも日本の伝統的な都市としての京都にぴったりだなと感じましたが、地元の人にとってはどうでしょうか。

もちろん京都が古都であることはまぎれもない事実なのですが、それを素直に受け入れることは、近代の京都には少々辛いことであったのではないのでしょうか。

園田英弘氏の研究によると、かつてはミヤコとは京都そのものを意味した。ミヤコとは王宮性・首都性・都会性の三つの条件を必要とした。平安京はその意味でまさにミヤコであった。ところが、武家政権の誕生とともに、首都性は京都から去り、王宮性と都会性のみになった。そして京都は雅な文化の地として、他に比して優越する都会性を有していたが、江戸中期以降は、江戸と大坂にその都会性もぬかれてしまい、王宮性のみを誇りとする都

市に墮してしまった。遂には明治維新によって、天皇の東京遷都を招き、王宮性すら無くしてしまったといわれます。つまり京都は明治には、京都から古都になってしまったのです。

それに引き換え、江戸は將軍権力の存在と、産業の発展によって、首都性と都会性を兼ね備え、東京となることによって王宮性をも獲得し、名実共にミヤコとなりました。つまり江戸から東京への変身です。

社会的評価は江戸の上昇、京都の衰退となりましょう。その京都の人々に『古都』と言っているのけるのはいささか酷ではないでしょうか。明治期、京都人が「第二の奈良になるな」というスローガンを掲げたことを考えればなおさらです。しかし、私は逆に、京都は都会でなくなってよかったですと思います。都会でなくなったために、近世都市の景観のままに居住空間が維持できたのです。東京は首都となったために、無計画な都市発展を展開し、ドーナツ化現象で、都心には人がすめなくなりました。

#### 4 京のぶぶづけ

「京のぶぶづけ」ということがよく言われます。とくに近年、サントリーの「お茶」の宣伝で、市田ひろみさんが、典型的な京都人

を演じて話題になりました。「どうぞどうぞ、何にもあらしまへんけど、お茶でも飲んでいておくれやす」と客に長居を勧めながら、実は「さかさ帚」がしてある。第二弾では「新幹線なんか待たしといたらよろしおすがな」と話す。

これは、京都人は本音と建前が違う、だから恐いということ逆手にとったCMです。

ですが、「本音と建前が違う」のは、果たして京都人だけでしょうか。今の世の中、ほとんどの人は、社会生活においては「本音と建前が違う」生活をしているのではないのでしょうか。本音とはなにか、ということ考えた時、「気のおけない人」つまりごく親しい友人・家族との会話をまず想定することができます。つまり多少乱暴な意見をいっても、自分という人間を相手がよく理解してくれていて、自分の発言を悪くは解釈しないでくれる人に対して話す内容ということでしょう。話者と聞き手との間に信頼関係が成立していて初めて可能なものが本音なのです。

かつて京都の人が、ことに「本音と建前が違う」と言われるようになったのは、京都に余所者が多くやって来たためではないかと考えられます。京都が都会であった証明なのです。農村は基本的には、ずっと住みついた人達で構成されています。ですからたまに他所から人がやってくると、大変目立ち、すぐにそれと知られます。地域差があって、余所者を「客人」として歓待する村もあれば、「異類の者」として排斥する村もあったでしょう。排他性からいえばおそらく農村のほうが強いのではないでしょう。ところが農村にはあまり人は訪れないから、それほどその排他性は話題にならないのです。

それに対して、都会には多くの人が流入して来ます。生まれた土地で生活出来なくなった人達、職を求める人、一旗組、等々いろんな人が都会にはやってきます。彼らのうちの何人かはまた別の土地に移ってゆき、また何

人かは都会に住みつきます。このような人達は、もともと都会に住む人達にとって、付き合いなければならぬ未知の人、エイリアンなのです。得体の知れない恐い存在なのです。付き合いを持たなくてもよければ知らん顔できるし、一過性であればおあいそしているだけで済む。しかし付き合いそのものが未知数である時、安全装置として「本音と建前が違う」付き合い方が生み出されるのです。

これは同時に防衛本能でもあるのです。住民は自分達が住む世界を守らなければなりません。しかもそれは平和的手法によって。江戸が生き馬の目を抜くと呼ばれたのも、同じ様に地方民からの印象でした。

地域共同体の防衛という最大のテーマは、現在も重要な意味を持っています。同じ町内に他所から人が入ってくる。そして地域の中で共同体生活を送りはじめるとなると、無関心ではいられません。当然、地元民達は、新住民に対して、共同体の仲間たりうるかどうかの観察をはじめます。その観察は、される側にとってはいやなもの。す。3代つづかないと京の住民とは認められない」というのは少々大袈裟でしょうが、代々そこに居住している人達にとっては、どこか行く場所のある人達は、簡単に共同体成員として認められないというのもまた宜なるかなといったところでしょう。地域共同体は運命共同体でもあったわけです。その運命共同体に入るには、人生でいうところの通過儀礼が必要であったのです。

現代では、そのような古き良き共同体は崩れつつあります。それゆえ「ぶぶづけでも」の文句を聞くことはなくなりました。このことは果たして良いことなのでしょう。

おそらく、地域共同体の消滅は、最大の都会である東京からはじまったと考えられます。それゆえ田舎ではまだ古いしきたりや近所付き合いがあって、嫁に行くのはいやだと意見も聞きます。これはおそらくその通り

ではないかと思えます。東京は都会になることで、共同体を保てなくなったのでしょう。どんどん流入人口が増えてくると、地元民よりも新住民の方が多くなります。すると、本来の共同体規制を発揮することが不可能になります。そうなると、地域の和が無くなり、個別化が始まり、「隣りは何をやる人ぞ」ということになります。

お互いに生活には干渉しなくなると、助け合いも無い代り、おせっかいや規制もない。他所から来て、他所へ移って行く人達には便利このうえない状況となります。しかし、そうはなっても地元民として、そこに永住する家庭もあるはずで、彼らはどうなるのでしょうか。地域共同体の結合を破壊され、他者からの防衛力を剥ぎとられ、非常に無力な存在に落とされるのです。これが近代の都会の典型です。

京都でもこの傾向は無視できません。地上げて固定資産税が上がり、地元に住めなくなり、そこにマンションが立ち、新住民がやってくる。そうしてかつての町組織は崩壊するといった、地域もたくさんできました。

しかし、明治維新で地方となった京都は、ある意味で近代化を謀りながらも、近世都市の良さを維持して来た都市でした。小学校が町によって作られたことも大きな意味を持ちました。むかしながらの町組織の範囲で小学校が成立し、これが地域共同体の基盤を存続させたのです。

首都とならなかったせいで、人口増加もさほどではなかった。そのため、無計画な建築破壊から免れたといえます。そして平安京を基礎とする、狭い範囲に適度の人口を保つことで、安定した都市として成長が可能だったのです。

人の行動範囲はそれほど広くありません。せいぜい歩いて30分圏内ではないでしょうか。距離にして1km~2kmです。それ以上になると、わざわざ出かけるということになります。

玄関を出てそのまま行くということにはなりません。東京はなんでも物が揃うといいますが、それは嘘です。電車に乗って何駅も行くのなら、それは「ある」ことにはならないのです。

いくら情報誌に、おいしいケーキ屋さんが載っていても、たった一つのケーキを買いに、地下鉄に乗って片道1時間かけて出かけるというのは、よほどの有閑階級にしかできないことです。

私が住んでいます亀有から東京駅まで45分ほどかかりますが、この時間は京都の四条大宮から大阪の梅田までの時間と同じなのです。

人は自分の行動範囲の中で居住しているのですから、その範囲内の住環境が問題となるのです。その意味で、30分あれば、京都では堀川通から河原町通まで、四条通から丸太町通まで歩くことが可能でしょう。これは京都の繁華街をすっぽりと覆ってしまう範囲です。この中ではほとんどの物が手に入ります。近世都市の規模というのは、生活しやすい規模だったと考えています。

そして、本来の都会性とは、この便利さを意味したはずで、都会にはいろいろな店があり、映画館・劇場等の文化施設がある。そんな所に住んでみたい、そうかつての地方の人々は思い描いたはずで、つまり居住空間の中に、商業・文化等の施設があり、それらを容易に享受できるというのが、都会であったはずなのです。ところが、現代の都会は、都心から居住空間を排除し、人間を不便な郊外へと追いやってしまっているのが、一般的な現状です。それゆえ、都会を守る担い手が存在せず、都会はどんどん経済の侵食に任せるままになっているのです。

## 5 文化財は誰が保護するか

文化財保護ということが、近年ようやく世論にも登ってきました。しかし文化財がここ近年に出現したわけではありません。むしろ

古い物ほど文化財の価値が高くなるのです。ではこれらの文化財は誰が守ってきたのかというと、お寺は寺の僧侶や檀家が、神社は神主や氏子が守ってきたのです。そして都市はその都市住民が守ってきたのです。もちろんこれらの人が保護だけを行って来たのではなく、破壊も部分的には行っています。ですが破壊は主としてお金のある人達と国家や行政が行って来たといえましょう。

観光寺院という言い方がありますが、檀家のない寺院は建物を維持存続させるためには、拝観料をとるのもやむをえない仕儀なのです。ことに貴族や將軍などの個人的宗教心をもって建設された寺院は檀家を持ちません。しかも権力はしばしば交代し、その開祖が亡くな

ると、その寺院は世間から見向きされなくなるといふ事態がおこりました。寺院はみずから維持存続の方法を講じなければならなかったわけです。

町並みについては、特別な意識をもって保存されて来たわけではないでしょう。むしろ京都にしても、平安時代の建物が維持されたわけではありません。最初に話しましたように、なんども戦火にあい、その度に新しい建物を建てて来たのです。上杉本の「洛中洛外図」に描かれた民家は掘っ立建築で、板屋根に重しの石がのせられています。まさに戦火の後に建てられたという感じがします。

現在の京都に残る町屋でも、近世に建てられたものは数えるほどです。その多くは明治

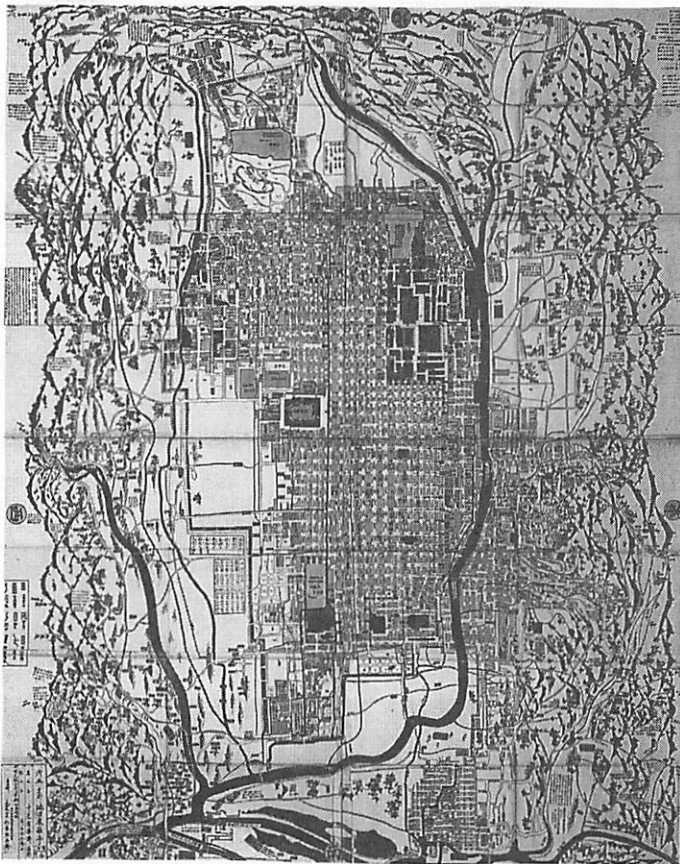


図3 京都細見大成



初期に建てられたものです。しかしそのモデルは近世建築にあります。保存対象となった杉本家住宅も明治初年のものです。

明治の京都の近代建築といえ、すぐに思い浮かぶのは、今は京都府立京都府文化博物館の旧館となっている、もとの日本銀行京都支店です。これは赤煉瓦造りの洋風建築です。寺町から烏丸通にかけての三条通はこのような近代建築が立ち並んだ通りでした。これはこれで結構きれいなものです。ですから日本の木造建築だけが良くて、洋風建築がダメというわけではありません。

ようは景観の問題になります。三条通というのは、平安時代の昔から商店街でした。それゆえ金融機関も多く、近代資本主義の洗礼を一番に受けても違和感がありません。しかも近代建築といっても、まわりの民家を無視した建て方はされず、高さもせいぜい3~4階です。この明治の頃の三条通の模型が京都府文化博物館にありますから一度ご覧になってください。けっして景観を損ねるものではありません。

近年、京都では景観論争が起こっております。いわゆるバブル経済によって、地上げが急速に進み、多くの町屋がビルに立て替えられ、ノッポビルが増えることによって、京都の景観がだいなしになるというのが、マスコミによる受け取り方です。しかしことはそれほど単純ではありません。問題は大きく分けて、文化的な問題と居住環境問題の二つになります。

居住環境の問題としては、大きなビルが隣に出来ることによって、日照権が侵害され、地価が上がり、固定資産税があがって生活しにくくなるという、現実的なそして法的な問題が生じます。

次いで、固定資産税が高騰することによって、多くの文化財が失われるという事態が発生します。統計的なデータを持ち合わせませんが、寺町から多くのお寺がなくなりました。

この寺町の形成は豊臣秀吉による京都改造計画に遡ります。

秀吉は天正19年(1591)閏正月に御土居の着工につき、京都改造を始めます。御土居とは京都の市街地を取り囲む堤防のようなもので、当時は「堤」とか「京廻ノ堤」と呼ばれています。『三藐院記』には、

一、天正十九(閏)正月より、洛外に堀をほらせらる、竹をうへらるる事も一時也、二月に過半成就也

と、当時の様子が記されています。

このお土居なども、ある箇所は大谷大学の建設の際に、崩されて土砂に使われたと聞いています。一権力者が築いたものをあまり評価するのは問題があるかもしれませんが、すでに年月がたったものですから、文化財としてみなしてよいでしょう。当初はお土居も村を分断して、住民の生活を無視して作られた面もあったのですが、豊臣政権が短命であったため、それほど堅苦しい存在とはなりません。それがよかったのかもしれませんが。賀茂川沿いのお土居はけっこう早い時期に崩されているところもあります。これは賀茂川と京都住民の結び付きの強さを示すものであり、別の問題があるのですが、歴史性をもつと、権力者の構築物も支配・被支配の関係を脱却して、天下人秀吉の築いた旧跡となってしまう、むしろ徳川に対して懐かしむ存在になっています。

話が逸れてしまいましたが、寺町の形成も秀吉の京都改造という権力者の政策でしかなかったのですが、時代とともに、その空間は歴史性を持ち、京都住民の生活空間の一部に溶けこんでいきました。そしてその寺が連なるという景観が京都の町の特徴の一部となり、個々の寺以上に、寺町という街路が文化財的存在となったのです。

京都の人達が金銭的にこれらの寺を維持したとは申しません。しかしこの景観を大事にし、肯定し、親しんだのは事実です。この気

持ちこそが寺町を寺町として維持させた原点ではないでしょうか。はなはだ抽象的な話しになりましたが、地域住民が文化財を保護するとは、まさにこのことではないかと思うのです。つまりそれを文化財と認識し、その存在を肯定する気持ちが大事なのです。

さらにいうならば、我々は観光地をまるで、そのために作られた「見物空間」とみなしてはいないでしょうか。つまり遊園地や娯楽施設のように、それを楽しみに来る人達のために、人工的に整備された空間であると錯覚していないでしょうか。

京都に来る修学旅行生たちの行動をみると、そのように感じます。小さな事を申しますと、彼らが朝、旅館から出て来てバスに乗る時、だらだらと列も作らず乗り込んでいます。ところが観光バスの止まっている場所は、一般の公道であって、朝の通勤時には、通勤バスや自動車・自転車が通る道なのです。大きな観光バスが何台も止まっているというだけで、市民にとっては大変な迷惑なのに、そのうえ学生達がばらばらに歩いていると危ないという気持ちを乗り越えて、腹立たしいのです。しかもその学生達に引率の教師達はなんら指示を与えない。もし引率が面倒で、学生達の自由を尊重したいというのなら、修学旅行なんかやめてしまいなさい。彼らは勝手に好きなところに、好きなように旅行に行くでしょう、と言ってやりたくさへなります。

これは学生達に限りません。大人達の団体旅行についても同様の事がいえます。団体旅行客は自分達は、「旅行者」であるということが特権かのような錯覚を起こし、我が物顔で道をのし歩きます。京都市の道路は観光客のために設けられているのではなく、市民のためにあるのです。市民こそが市民税をはらって、道路整備費用を出しているのです。そういう意味では、観光客は歩かせてもらっている立場なのです。もちろん彼らはお金を払って旅行をしているでしょう。しかしそのお金

は旅行代理店に支払われているわけであって、京都市民にはなんら関係ありません。これは他の観光地についてもいえることです。

「旅は相身互い」という言葉がありますが、これは旅人同志のことだけではありません。旅人と地元民との間の交流を指している言葉だと思います。旅行者は他人の家に入るような気持ちで訪れ、地元の人も観光客に自分の家のお客のように接すればひじょうにうまく行くのではないかと思います。

これは余談ですが、京都には市バスといって、京都市が運営する乗合バスがあります。京都は基本的には歩く町ですが、この市バスもよく利用されます。ところが、旅行シーズンになるとこの市バスが旅行者で占拠されるのです。他の観光地ではこのような事はあまりありません。たいがい観光バスかタクシーが利用されます。ところが京都は観光地であるとともに都市でもあります。そのため交通網が比較的整備されているわけです。つまり都市住民のための交通網が、旅行者にとって安い交通手段になるというわけです。

中学生・高校生がタクシーを乗り回すのを見るよりは、自分でルートを考え、バス停を調べて地元の交通機関を利用するという方が健全であり、望ましいことなのですが、そこに地元民への思いやりも加味していただけたらと思うのです。旅行者はたいてい疲れています。そのため椅子に坐りたい気持ちもよく分かります。私は老人がすべて弱い存在とは思いませんし、元気な老人がいることも実感しています。ですから老人がきたら疲れていても席を譲れとはいいません。しかし、乗合バスは40人も乗ればいっぱいになって動きがとりにくくなります。そこへ旅行者の団体が10人も20人も乗り込めばどうなるかを考える必要があるのではないのでしょうか。それとそもそもが市民の交通機関であるから、通勤・帰宅時間帯は普段でも混む、その時間帯に団体で乗り込むことがどういう事態を生むかと

いうことも考えねばならないでしょう。

せめて身体の不自由な人と赤ちゃんをだっこした人が乗って来た時ぐらいは、席を譲り、場所を開けてあげて欲しいものです。

さて、本題に戻りましょう。観光地が人工的に設営された空間でないならば、そこに存在する文化財はどういうことになるでしょう。文化財そのものは地元民にとっても、観光者にとっても、本来は無関係のものです。しかし普段の生活や私利私欲に関係ないからといって、我々はその文化財を棄てようとは思いません。我々は、我々の先祖が残した物に対して敬虔な気持ちを持ち合わせています。これは資本主義では計り知れないものです。そして奈良や京都、鎌倉・萩・津和野などの歴史の香りのする所に好んで出かけるのもそのゆえです。

これはそのことが良いことだ、といった次元ではなく、そのような古い物を懐かしんだり、先人の遺跡を訪れることが、人間の精神生活にとって必要欠くべからざるものだから、行われるのだと、私は考えます。もっと言うならば、博物館や美術館に出かけるのは、他人に教養を誇りたいからではなく、文化財や芸術品をながめて、日常生活から離脱して、日常とは全く異なる精神状態に没入することが生きて行くうえで必要な行動なのだと考えるわけです。

つまり旅行をするのも、文化財・芸術品をながめるのも、すべて自分のためであると。

景観論争が起こった時、さらに遡って「古都税」論争が起こった時、我々は京都に対して他人ごとのようにニュースを見ていたのではないのでしょうか。しかし、文化財や観光地京都が我々の精神文化にとって必要なものであるならば、我々こそが率先して守らなければならないのではないのでしょうか。

ちょっと想像していただきたいのですが、京都が東京の丸の内や霞ヶ関のように、あるいは渋谷や新宿のようになって、古い遺跡や

社寺も無くなってしまったらどうします。まだ奈良があるからといって、奈良にゆくだけですか。すくなくとも私はさびしくてしょうがない。勝手な思い込みかもしれませんが、日本の古都が無くなることで、埋めることの出来ない空漠たる思いに駆られます。

もし、我々が京都を、そして京都の文化財を大切に思う気持ちがあるのなら、我々こそがそれを守るように、国や京都に働きかけなければならないのではありませんか。京都市が、都市の発展のために新宿のようにしたいのだといっても、いやそれはかんべんしてくれ、と御願いしなければならぬのではないのでしょうか。

開発とはけっして、ビルを建てることでも、遺跡を破壊して不動産屋が儲かることでもないのですが、とかくそう思われがちです。それは今はおいておきますが、とにかく、京都市が都市開発でビルを建てたいといっても、泣いて止めさせなければならないのは、今戦っている地元の人達ではなく、そこに旅行に行く我々なのです。

#### 参考文献

- 宮本憲一『都市をどう生きるか——アメニティへの招待』小学館,1984  
 園田英弘『「みやこ」という宇宙 都会・郊外・田舎』日本放送出版協会, 1994  
 中村修也「観光都市論(上・下)」(『史境』29・30, 1994~5)  
 京都市編『京都の歴史』第4巻、京都市史編さん所、1969  
 野間光辰編『新修京都叢書』第1巻、臨川書店、1967  
 野間光辰編『新修京都叢書』第11巻、臨川書店、1974  
 ジョアン・ロドリゲス『日本教会史(上)』大航海時代叢書第1期第9巻、岩波書店、1967

【付記】本論は平成6年度文教大学地域開放講座「見えないものを見てみれば」の第7回講演の「京都1200年—観光都市の表と裏」の講演原稿に加筆訂正したものである。